

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『プロヴァンシャル』の作者名について（要旨）
Author(s)	石川, 知広
Citation	フランス文学 , 34 : 61 - 63
Issue Date	2023-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054189">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00054189</a>
Right	
Relation	



## 『プロヴァンシャル』の作者名について（要旨）

石川 知広

パスカルの『プロヴァンシャル』は、元々印刷・出版許可のない地下文書であり、作者名を隠した冊子の形で計18通発行された。そして、キャンペーンが終結を迎えた際、全体をまとめた総集編がルイ・ド・モンタルトという偽名のもとに刊行された。本発表の目的はこの変名の由来、そこに含まれた意味論的連関を考察することである。

こうした探索の試みは、これに関する資料がほとんど伝存してこなかったためもあってこれまで殆ど行われてこなかった。しかし、たとえ推測の域を出ない恐れが大きいとしても、作品としての『プロヴァンシャル』、および執筆行為の主体としての〈作家〉パスカルの特異なあり方を改めて問い直すためには、あながち無駄ではないであろう。

以下本発表では、この偽名を「ルイ」と「ド・モンタルト」のふたつに分解し、それぞれ順に考察するものとする。

1) 【ド・モンタルト】——この名については幸いひとつだけ証言が残っている。ポール・ロワイヤル第2世代のポーブランは、回想録の中で、「モンタルト Montalte」はパスカルの故郷オーヴェルニュの山々に事寄せたもの、と述べているのである。さてここで少し迂回し、妹ジャクリーヌの兄パスカル宛の手紙（1655年秋）に見える「ド・モンズ氏 M. de Mons」なる変名に注目する必要がある。この証言により、『プロヴァンシャル』より少し前の時期、パスカルが確かに「ド・モンズ氏」なる偽名を使っていたことが推定できる。他方、この偽名は、ポール・ロワイヤル関連の他の歴史書に、『プロヴァンシャル』執筆中のあるできごととともに登場する。次のような逸話である。

パスカルが「第7」もしくは「第8」の「手紙」を準備していた際、ちょうど義兄のペリエも上京して同じ旅館に泊まっていた。あるときそこへ親類筋のイエズス会士が訪れ、会ではパスカルが『手紙』の作者との噂があるので身辺注意すべきと忠告しに来たことがあった。ところが間の悪いことに部屋には刷り上がったばかりの「手紙」が乾燥のため並べてあったため、大慌てでベッドに隠し何とか発覚を免れた。

この話は、上述のポーブランを含め三つの資料により伝えられているが、地下出版のパンフレットとして発行された『プロヴァンシャル』が官憲の厳しい追及・捜

索を受けていたこと、執筆から印刷・頒布に至る全過程で最大限隠密な行動を心がける必要があったことを物語るものである。パスカルは身元を隠して近所の旅館に投宿し執筆を続けていたが、問題は、その折にどんな変名を名乗ったか、ということである。そして、最も時代の新しいクレマンセによれば、その折パスカルが名乗った名前はド・モンズ氏だったという（他のふたつは身元の隠蔽には触れても名前には言及していない）。

ここでド・モンタルトとド・モンズの関係を考えて見る。Montalte が、Mont と alte に分解できること、mont の語源はラテン語 *mons*（山）であり、alte はラテン語 *altus*（高い）の変形形であること——これら二点から、まずモンタルトという名前は「高い山」を意味すると推定できる。次に、「モンズ」は意味論的には「モンタルト」に含まれていることから、モンタルトはモンズの発展形として生まれたと考えられるだろう。そして「モンズ＝山」には元々「高い」という含意があるとすれば、モンタルトは、高さのコノテーションを可視化しつつ改めてモンズに付加したものとなる。こうして、「ド・モンタルト」は、「高き峰より語る語り手」の設定を意味することになる。それは『プロヴァンシャル』というテキスト＝発話の説話論的戦略を表すのである。

2) 【ルイ】——この名の由来には二つの可能性が考えられる。ひとつは、パスカルの甥（姉夫婦の二男）ルイの名を借りたという推定である。ルイはパスカルの父エティエンヌの死後わずか三日後に生まれている。父親とのきわめて密接な関係を考えれば、パスカルにとってルイが深く敬愛する父の生まれ変わりのように感じられた可能性は小さくない。そこから、ルイの名を名乗ることは、キアスムによって間接的にエティエンヌと同化・合体することを可能にすると考えられたかもしれない。当時のカトリック社会の代父母制度の根底に、世代を超えた血の継承と再生という古代的思考の名残があった可能性に鑑みれば、パスカルの無意識がそのような思考を働かせたと推測することは必ずしも不合理とは言えないであろう。

もうひとつは、「ルイ」を「王」の換喩とみなし、ルイ・ド・モンタルトを「モンタルトの王」と読み替える可能性である。パスカルが真空論と流体平衡論の研究に心血を注いだこと、そして、科学史がパスカルを17世紀におけるこの分野の第一人者と認めていることは周知の事実であり、特に、山の高度と水銀柱の高さの相関を調べた実験は流体静力学の金字塔のひとつとなっている。パスカルがこの成果を誇りとしたことに疑いがなくすれば、自分を「流体平衡論の王」と自負したとしても不思議はない。この山上実験はピュイ・ド・ドームで実行された。その意味でピュイ・ド・ドームは、流体平衡論の正しさが確定した記念すべき場所、言わばその代名詞と言ってよいであろう。つまり、ピュイ・ド・ドームは流体平衡論の換喩

としてそれに置き換え可能なのである。ここから、上の「流体平衡論の王」は「ピュイ・ド・ドームの王」となるであろう。そして最後に、オーヴェルニュの高い山「ピュイ・ド・ドーム」を「モンタルト＝高山」に置き換えると、偽名ルイ・ド・モンタルトが完成することになる。

3) (結論) パスカルの偽名＝筆名は実はひとつではない。他にアモス・デットンヴィル (『ルーレット書簡』) とサロモン・ド・テュルティ (『パンセ』草稿) のふたつがあるが、これらはルイ・ド・モンタルトのアナグラムであり、三つの偽名、三つの文書の間には何らかの相関関係が存在すると考えられる (ただし今回これは考察から外した)。

最後に問うべきは、作家としてのパスカルの自己同一性と偽名使用の関わりである。偽名と本名の相違と同一性は、相異なりつつ反復する同一性、自己同一性のうちに闖入する他性の特異な姿を暗示するのではないか。〈作者〉パスカルと生身のパスカルの間に介在するこの不可視の他性こそが、パスカルならざる読者、キリスト教徒ならざる読者に、〈パスカルを読む〉ことの可能性を開いてくれるのかもしれない。

【本講演は、科研費基盤研究(C)「文学研究の方法と作家像の相関性に関する研究 - パスカルの『プロヴァンシアル書簡』」(代表・野呂 康)、および文芸事象の歴史研究会主催の企画(Projet Pascal, les Provinciales 2024 (PPP 2024))に関連して行われた。